

検証主義的意味論の可能性と反実在論の意味

——千葉・秋葉論文の疑問に答える——

富山 豊
(千葉工業大学)

序

本論文は、千葉清史「フッサー現象学とダメツ的実在論——富山豊『フッサー：志向性の哲学』についての一考察——」、および秋葉剛史「志向性と意味——富山豊『フッサー：志向性の哲学』を読む——」（いずれも『フッサー研究』第23号所収）における拙著『フッサー 志向性の哲学』に対する批判、疑問に答えるものである¹。これらの批評および私自身の回答は、2025年1月26日にフッサー研究会の主催で開催された拙著合評会での討論に基づいている。

本来であれば、まずは拙著の議論を概観し、そこで提示した志向性理論の要点を解き明かしてから批判への応答に向かうのが読者のためには親切であろうと思うものの、拙著の概説的紹介としては本誌『フッサー研究』の第21号に拙論「フッサー現象学の鍵概念(2):「志向性」(以下「鍵概念」)が掲載されており、これがわずか二年前に書かれたものであることもあり、重ねての要約は割愛させていただくことにする。拙著の議論に不明な点があれば、「鍵概念」のほか、もしさらなる関心があればぜひ拙著をお読みいただきたい。

応答の順序としては、まず千葉の疑問に答え、そのあとで秋葉の疑問に答える

1. 両者への参照は簡便のため(千葉, pp. xx-xx)、(秋葉, pp. xx-xx)の形で記す。また、本論文内で「拙著」と言及しているのはすべて『フッサー 志向性の哲学』のことであり、参照の際はこちらも(富山, pp. xx-xx)のように記す。

形を採る。その理由は、千葉の疑問に回答することで拙著で提示した検証主義的意味論の要点を確認し、ありがちな誤解を防ぐことができ、それを前提として秋葉の疑問に答えるという順序が理解に資すると思われるからである。なおお評会の当日には、千葉・秋葉のお二人以外のフロアの聴衆からもいくつか重要な質問をいただいていた。本来ならばこれらの質問にもお答えしたかったのだが、紙幅の都合により割愛せざるを得ないことをあらかじめお詫びしておく。

1. 千葉の疑問への応答：検証主義的意味論の基本的なアイデア

千葉の第一の疑問は、言明の意味を「その言明が真であると確証するための検証手続き／証明手続き（の仕様・型）」と考える検証主義的意味論の基本的なアイデアに対するものである。千葉は、「最大の双子素数のようなものは存在しない」という例文を用いて、この言明の理解のために必要なのは何であるのか、と問う（千葉, p. 122）。最大の双子素数が存在するかどうか、つまり双子素数が無限個あるかどうかは未解決問題であるため、この言明の証明も反証も誰も手にしておらず、それゆえ証明や反証の理解によってこの言明の意味の理解を特徴づけることはできないのではないかと²、というわけである。

千葉が引くように、私自身が拙著で提案した回答は証明の仕様、すなわち「「どういうものであればその証明になるのか」という一般的枠組み」の理解をもって意味の理解とみなすという方策である。千葉はここで、無限領域への量化を含む数学的言明の証明には有限個の事例では足りず、数学的帰納法などであれば十分な証明になることへの理解などが要求される、ということ述べた私の議論³を引き、「このようなことは、件の言明の理解のために検証主義的意味論が要求すべきこととしては明らかに弱すぎる」と主張する（千葉, p. 122）。しかし千葉のここでの議論は誤解を含んでいる。確かに千葉の言うように、自然数上の無限量化の意味の理解、たとえば数学的帰納法の理解だけで「最大の双子素数のようなもの

2. ここで千葉はこの言明の意味を我々が理解できていることを前提に議論を進めており、この前提には私自身も同意する。

3. 「最大の双子素数のようなものは存在しない」という例文はこのまま素直に理解すれば否定存在言明（ $\neg\exists x \varphi(x)$ ）だが、「すべての自然数について、双方ともそれより大きな双子素数が存在する」と読み替えれば全称言明（ $\forall x \varphi(x)$ ）として理解可能であり、以下の議論でも適宜そのように読み替えていただきたい。

のは存在しない」という言明の意味の理解の全体を説明できると考えるなら、自然数上のすべての全称命題は同じ意味を持つことになってしまう。もちろんこれは明らかに避けるべき帰結である。しかし、私が当該箇所では主張したのは、あくまで「この言明に登場する「すべての自然数について」という全称の部分の意味を理解するには何が必要なのか」ということである。当該言明にはもちろん全称量化の表現以外にも、「双子素数」のような表現が含まれている。これらの概念や、その構成の順序によって当然ながら言明の意味は変わってくるのであり、全称量化の表現の理解のみによって言明全体の意味が与えられるわけではない。これは、連言（「かつ」）を含む言明を例に採れば容易に理解できよう。「 $2+3=5$ であり、かつ $3+7=10$ である」という言明と、「 $4^3=64$ であり、かつ 6 は完全数である」という言明は、どちらも「かつ」という表現を含んでいる⁴。この「かつ」の理解は何に存するのか、という問いに対して、「A かつ B」という言明を証明するには、A の証明と B の証明の双方が必要であり、これらを揃えてペアにして提示したものが「A かつ B」の証明である、と答えるのが（直観主義論理のいわゆる BHK 解釈に基づく）検証主義的意味論の標準的な回答である。これはもちろん、このような「かつ」の理解だけで両者の言明の意味のすべてが説明できるということではない。「 $2+3=5$ であり、かつ $3+7=10$ である」という言明の理解には当然ながらこれ以外に自然数上の足し算の意味の理解が必要であるし、「 $4^3=64$ であり、かつ 6 は完全数である」という言明の理解には自然数上の掛け算の理解や「完全数」という概念の理解が要求される。そしてまた、構成要素がすべて同じだったとしても「 $2+3=5$ であり、かつ $3+7=10$ である」という言明と「 $2+5=3$ であり、かつ $10+3=7$ である」という言明では意味が異なるのだから、言明全体の意味は部分表現から全体を構成する構成の順序にも依存する。それゆえもちろん、「かつ」の部分の意味の理解を「双方の証明のペア」ということで説明したからといって、これだけで言明の意味が尽くされ、すべての連言言明が同じ意味になってしまうわけではない。同様に、数学的帰納法の理解はあくまで自然数上の全称量化という部分の意味を説明するだけであり、これだけで全称言明全体の意味が説明されるわけではない。

では、「最大の双子素数のようなものは存在しない」という言明、あるいは全称言明に言い換えれば「すべての自然数について、双方ともそれより大きな双子

4. なお、「 4^3 」は「4の3乗」を意味し、「完全数」とは「それ自身以外の約数の総和がそれ自身と等しい自然数」を意味する（6の約数は1, 2, 3, 6であり、6自身を除く1, 2, 3の総和は6であるから、6は完全数である）。

素数が存在する」という言明の意味はどのように説明されるのか。検証主義者は、何がこの言明の証明になるのか、ということの理解によってそれを特徴づける。この全称言明の証明とは、任意に自然数が与えられたとき、それよりも大きな二つの素数であって、その差がちょうど2であるようなものを構成するやり方があることを示すことである。こうしたことを示すための方法は一般には複数考えられ、単一の証明のみが証明として認められるわけではない⁵。それゆえ、この言明の意味の理解は、特定の証明を知っていることではなく、何がその証明として認められ、何が認められないかということを一般的な形で理解することなのである。当然ながら、「最大の双子素数のようなものは存在しない」と「最大の素数は存在しない」ではその証明として認められるものの範囲はまったく異なるので、こうした特徴づけによって自然数上のすべての全称言明が同じ意味になってしまったりはまったくしない。

なお、千葉は数学的帰納法による全称言明の意味の特徴づけに対して、これはある意味では逆に強過ぎるのではないか、という疑念も呈している（千葉, pp. 122-123）。というのも、「最大の双子素数のようなものは存在しない」やゴルトバッハ予想（「2より大きいすべての偶数は二つの素数の和で表せる」）のような言明は（「素数」や「双子素数」の意味を説明しさえすれば）小学生にさえ理解可能なように思われるが、彼らはおそらく数学的帰納法の理解は持っていないだろうからである。このような例を考えれば、自然数についてのすべての全称言明の理解に数学的帰納法の理解を要求するのは、確かに過大な要求に思われる。

確かにこれは検討に値する重要な指摘であり、私自身、この疑念は理解できないわけではない。それゆえ躊躇いがまったくないわけではないのだが、しかしやはりこれは一見するほど過大な要求ではない、とここでは論じることにしよう。というのも、数学的帰納法の理解をまったく欠いているのであればその場合やはり当該言明の十全な理解にはいまだ至っていないか、または当該言明の理解がある程度できていると考えるならば、その場合はその人は漠然とであれ数学的帰納法の理解を既にある程度持っていると考えことはそれほど不自然ではないと

5. 初等的な数学における例を挙げれば、直角三角形についての三平方の定理が、「その三角形を四隅に配置して斜辺に囲まれる正方形の面積を考える」ことによっても「直角から斜辺に垂線を引き、各辺を斜辺とする互いに相似な三つの直角三角形の面積比を考える」ことによっても証明できることなどを考えればよい。なお、カリー・ハワード同型対応に基づいてこれらの証明たちの属する（計算機科学の意味での）「型」としてこれらの「仕様」を捉えることができるが、詳細は割愛する。

思われるからである。

小学生のような子供であっても当該言明の理解は可能であると論じる千葉の議論を引こう。

ゴルトバッハの予想についての小学生の理解についての最も素朴でありがちな説明は、合成原理を用いた上で真理条件意味論に訴える、次のようなものだろう：子供はまず、「2 より大きい」「偶数」「素数」「和」といった語を理解する（これらの理解については、ダメットの表出論証をパスするような説明は容易に得られる）。次に子供は、これらの語を適切に組み合わせることで、「2 より大きい偶数は2つの素数の和である」という言明の意味を理解する（千葉, p. 123）

ここまでの説明は（これを「真理条件」とどのような意味で呼んでよいかという点を除いて）、私にもほとんど異論がない。だがしかし、以上の議論からゴルトバッハ予想の理解をこの小学生に対して帰属させるには明らかに飛躍がある。というのも、ここには「すべての」という自然数上の全称量化の理解の説明がすっぽり抜けているからである。ゴルトバッハ予想は自然数上の全称言明であって、この言明の理解にとって「これがすべての自然数について成り立つ」ということの意味は決して外すことができない。そしてこの理解は、「2 より大きいいくつかの偶数が二つの素数の和であること」を有限個の具体例で確認したからと言って、それだけで保証されるものではない。自然数は無限に存在し、有限個の事例の検証によっては決して尽くされないということの意味がここではどうしても必要である。では、そのすべての事例を確かめ尽くすことができないにもかかわらず、なお「すべての自然数についてあることが成り立つ」とはいったいどのような主張なのだろうか。それはもちろん、自然数である限りどんな自然数が任意に与えられても、それについて当該の主張が成り立つことを必ず示すことができる、という一般的な保証があるということに他ならない。そしてここで言われる「自然数である限り」とは、0 ないし 1 から、次の数、その次の数、という繰り返しのよって得られる数である限り、ということであろう。こうして構成される数である限り一般に何か成り立つ、ということの意味とは、これはもはやほぼ数学的帰納法の意味に他ならない⁶。そうであるならば、明確な定式化において数

6. もちろん自然数上の全称言明は、数学的帰納法以外にも一階述語論理上の全称導入則によっても示すことができる。一階述語論理上のロビンソン算術やペアノ算術といった算術の定

学的帰納法を証明技法として習っていないとしても、「すべての自然数について」という全称の意味をもし本当に理解しているのなら、その人は（たとえ小学生であっても）既に数学的帰納法に相当するものの理解を漠然とであれ持っているものであり、数学的帰納法の理解に不足がある程度に応じて、「すべての自然数について」という全称の意味の理解もいまだ漠然としているのであって、それゆえじつは「最大の双子素数のようなものは存在しない」や「2より大きいすべての偶数は二つの素数の和で表せる」のような言明の理解も十全ではないのではないだろうか。それゆえ私は、これらの言明の理解に数学的帰納法の理解を要求することは一見するほど過大ではないと考える。千葉の言うようにここでの理解を「当該の言明の（検証独立的）真理条件にはかならない」（千葉, p. 123）と考えてしまうと、この小学生が果たして「すべての自然数について」という無限量化の意味を本当に正しく理解しているかどうかを、示して見せることができなくなってしまわないだろうか。これはつまり千葉自身が先の引用部分で言及していたように、「ダメットの表出論証をパスするような説明」にはならなくなる、ということである。

2. 千葉の疑問への応答：反実在論という帰結

千葉の第二の疑問は、ダメットのフレーゲ解釈を下敷きとした拙著の解釈する志向性理論から、ダメットの反実在論という帰結は出てこないのではないかと、いうものである。じっさい、じつは拙著では私自身、この理論がダメットの反実在論を導くということは明示的には強調していない。しかしながら（千葉も推察する通り）、私自身はフッサール解釈としても⁷理論的オプションとしても、志向性理論からはダメットの反実在論が導かれるという理解の方が筋がよいと考えている。その理由を以下に述べよう。

式化ではこうした純論理的な「すべて」の理解と「自然数」の理解を切り離すことができないため、こうした議論の際には例えばマルティン＝レーフの直観主義タイプ理論のような枠組みの方がより適切かもしれない。

7. ただし、フッサール自身は必ずしも反実在論的帰結を自覚的には引き受けない可能性がある。ここで「フッサール解釈としても」と述べたのは、フッサール自身が自覚的ではないとしても、フッサール解釈として自然な前提から「本来は」反実在論的な帰結が「導かれるのが自然なはずであった」という意味である。

確かに千葉の言うように、拙著で私が表立って利用したのは Sinn（意義）と Bedeutung（意味）についてのダメットのフレーゲ解釈であり、数学的直観主義を背景としたダメットの意味の使用説や表出論証には表立って依拠してはいない。そしてフレーゲ自身は必ずしも反実在論者ではないので、この議論から検証主義的意味論や反実在論は必ずしも帰結しないはずである。にもかかわらず拙著でもフッサールの志向性理論を直観による確証の手続きを鍵としたある種の検証主義的意味論のように描いている節があり、また私のその他の論文や発表での言動は明らかに反実在論への共感を示しており、それを正当化するには明示された議論だけでは飛躍があるのではないか、というわけである。いやそれ以上に、千葉は拙著の議論をむしろ検証主義的意味論や反実在論とは相性の悪いものではないかとさえ疑う⁸。確かに拙著にはこれらを正当化する明示的な説明が不足しているということには同意するが（これは純粹に執筆当時の時間と紙幅の都合による）、後者は誤解であると私は思う。

千葉は、拙著における私の（特に第三章第六節における）議論が飛躍を含むにもかかわらずなぜうまくいっているように見えるのか、という理由のひとつを「そこでは決定不可能言明の Sinn がとりあげられなかったからだ」（千葉, p. 125, 註7）と診断している。だが、この註が付されている段落で千葉が挙げている「奇数の完全数であるような自然数は存在しない」（千葉, p. 125）における「奇数の完全数」はまさに私が（しかも第三章第六節で）「最小の奇数の完全数」として挙げている例であり、またそこでより正確な議論として参照が振られている拙著第四章第四節では「最大の双子素数」の例も挙げられている。確かにそこでは明示的には命題の形での例文が扱われているわけではなかった（という点では確かに私の説明にやや不親切なところはあった）のだが、しかしこれらの表現は典型的にその指示対象が有限時間内に見つかる保証のない事例であり、決定不能命題と同様の問題を提起する⁹。

では、なぜこうした言明の意味の説明は検証主義的・反実在論的でなければならないのか。それを理解するには、千葉の挙げる「奇数の完全数であるような自然数は存在しない」を例に採るのがよいだろう。この言明の意味の理解について、千葉は

8. 「ダメットによるフレーゲ解釈と並行的にフッサールの志向性理論を解釈することの結論が、検証主義的／反実在論的意味論になるはずがないのではないか？」（千葉, p. 123）

9. 正確に言えば、前者は任意の与えられた候補に対しては決定可能であるが、後者は個別の候補に対しても決定可能ではないという違いはある。

言明「奇数の完全数であるような自然数が存在する」の Sinn は何か？ 上述のような手続きを実行して、当たり判定が出る、ということだ。OK。ならば、「奇数の完全数であるような自然数は存在しない」の Sinn は？ 上のような手続きを続けて、当たり判定が出ないことか？ —— こう答えてもかまわないのだが（それは可能な答えではある）、その際の問題は、その答えを選択した場合、検証主義的意味論からは決定的に離反することになるということだ。（千葉, p. 125）

と述べている。だが、（もちろん千葉はここではそこまで強い意味でこの言葉を用いていないことは承知の上で）私はこれが「可能な答えではある」とは考えない。なぜなら我々はここで言われた「当たり判定が出ない」とはどういう意味かを理解できないからである。どういうことか。

これは、先に述べた自然数上の全称量化の理解とはいかなるものかという問題と同様である。もちろん我々は、ある時点で「当たり判定が既に出ている」と「当たり判定がまだ出ていない」ということを区別することはできる。それがどのようなことかについて（ダメットの表出論証の意味で）、理解を摺り合わせることは容易である。そしてまた、いまはまだ当たり判定が出ていないとしても、「今後このまま続けていけば有限時間内に当たり判定が出る」ということの意味も我々は理解できる。当たり判定が出たと言えるのはどのような状況かを我々は明確に示すことができ、それがある時点で生じたと言えるかを常にチェックできるからである。だが、「今後このまま続けていっても永遠に当たり判定は出ない」ということを我々はどのように理解できるのだろうか。「永遠に当たり判定が出なかった」と言える瞬間などというものはそれこそ永遠に来ない。それゆえ我々は、「永遠に当たり判定が出なかった」と言える状況などというものがどんな状況なのかを理解することができない。だから、「今後このまま続けていっても永遠に当たり判定は出ない」ということの意味がもしあり得るとしても、それは「手続きを無限に実行し続けてみたが結果として当たり判定は出なかった」ということの意味では決してあり得ない。我々に唯一理解可能なのは、「今後このまま続けていっても永遠に当たり判定は出ない、なぜなら当たり判定が出ると仮定すると不合理な帰結が生じ矛盾する、すなわち当たり判定が決して出ないことを証明することができる」ということに尽きる。たとえば我々は、「和が奇数であるような双子素数」を順に探す探索手続きが決して当たり判定をもたらさないことを

容易に知ることができる。それは、双子素数であれば当然 n と $n+2$ の形をしているはずであり、それゆえこの和は $2n+2$ すなわち $2(n+1)$ であって必ず偶数であるということを一般的な形で示すことができるからである。それゆえに、この探索手続きが当たり判定をもたらすという仮定からは矛盾が導かれる。このように、我々は「当たり判定が出ると考えると矛盾する」という仕方なら「当たり判定が出ない」ということの意味を理解できる。しかし、それ以外の仕方では「無限に続く探索手続きの中で当たり判定が永遠に出ない」とはいかなることなのかを理解可能にしてくれるような意味の説明は存在しないのである。そしてこれは、(いわゆる BHK 解釈に即した) 直観主義命題論理における否定の意味の標準的な説明である。それゆえ、私は事柄として、理論的に考えるならばここでの意味の理解は手続き論的、つまり検証主義的なものでしかあり得ず、それは直観主義論理の結合子の解釈に一致し、したがって(二値原理の拒否という意味での) ダメツト的反实在論を導くと考える。

では、フッサール解釈としてはどうだろうか。確かにフッサール自身は、二値原理を自明とみなす実在論的な前提を採っていると思われる記述をすることも多い。しかし、拙著およびその他の拙論でもこれまで述べてきた通り、フッサールの意味の説明は「直観における充実化の仕方」から理解されるものであり、これはほぼ「検証手続き／証明手続き(の仕様・型)」に対応する。さらに言えば、フッサールは否定言明の充実化を「肯定的な充実化の不在」によってではなく、「幻滅(Enttäuschung)」すなわち「肯定的な充実化と矛盾するような直観による反対の充実化」によって特徴づける(たとえば XIX/2, pp. 574-576)。それゆえフッサール解釈としても理論的観点からも、ここでの否定存在言明の理解は千葉の言う通り、

検証主義的意味論を固持せんとするならば、件の言明はむしろ次のように理解されねばならないだろう：「奇数の完全数であるような最小の自然数は存在しない」ということについての(上述の手続きのような枚挙の確認とは異なる)一般的証明が得られる(千葉, p. 126)

と理解せざるを得ないと私は考える。こうした正しい理解を示しておきながら千葉がこの点で拙著に疑問を投げ掛けるのは、

重要なのは、名辞の Sinn についての富山氏の手続き論的説明そのものの

うちには、フッサールの志向性理論がどちらの説明をとるか（あるいはとるべきか）を決定するような要素は何もない、ということだ。これは、『志向性の哲学』における富山氏の考察自体は、とりたてて検証主義的意味論にコミットするものではない、ということの意味する；それはむしろ、（少なくとも論証内在的に見られる限り）真理条件意味論 vs. 検証主義的意味論の対立に対して中立なのだ。（千葉, p. 126）

と考えたからである。確かに、これはフレーゲの Sinn と Bedeutung の区別だけから導かれる帰結ではない。しかし、拙著で述べたようにフレーゲの Sinn をダメット流に手続き論的に解釈するなら、そしてフッサールがそれと類比的に直観による充実化の手続きの理解として意味を理解していたことを踏まえるなら、こうした見解は自然に導かれるというのが私の理解である。それゆえ、確かに拙著では十全な明示的説明という点で不親切さはあったものの、拙著の議論が真理条件／検証条件、实在論／反实在論という争点に関して中立的だとは私には思えないのである。

3. ダメットの反实在論の意味と「対象そのもの」ということの意味

千葉の第三の疑問は、「対象そのもの」との関わりを強調する（少なくとも私の解釈する限りの）フッサールの志向性理論は「实在論」と親和的に思われ、「反实在論」とはむしろ相性が悪いのではないか、という点にある（千葉, p. 126）。確かに、我々の経験に関わるものという意味での志向的对象と「対象そのもの」、实在そのものの二重化を拒否して対象概念を一元化するフッサールの議論は、物自体と現象の二元論を（少なくとも何らかの意味で¹⁰）採用するカント的な意味での超越論的観念論よりは超越論的实在論に近いとは（二重化か一元化かというこの点のみに限って言えば）言えるかもしれない。しかし、ことダメットの意味での实在論／反实在論ということに関して言えば、志向的对象を対象そのものと考えすることにダメットの意味で实在論的な点は何もない。このことを以下に示そう。

まず、千葉が「著しく魅力を欠く」と退けているオプションにあらかじめ言及

10. いわゆる二世界解釈を採るにせよ二側面説的な解釈を採るにせよ、いずれにせよ何らかの意味での二重性は想定されるように思われる。

しておこう（千葉, pp. 126-127）。それは、「対象そのもの」ということの意味を我々が自然に理解するような实在論的なものから変更してしまい、認識に依存するような観念論的な対象概念とすり替えてしまうことによって「対象そのもの」への関係と観念論を両立させる方策である。以下に論じるように、千葉がここで述べるような「認識への依存」、「観念論的存在論」は極めて強い主観的観念論のそれであると読み、その意味ではフッサールはそうした対象概念はまったく採っていない。にもかかわらず、私はこの「対象そのもの」はあくまで認識と相關的にのみ意味を持ちうるという意味で観念論的であり、反实在論な在り方をしていると主張する。そしてこれは「意味の変更」ではまったくないとも主張する。というのも、ダメットや私の描くフッサール志向性理論の描像が正しければ、我々は「対象そのもの」とか「实在」といった概念を初めから検証主義的にしか理解し得ないからであり、ここには初めに理解されていたはずの意味からの「変更」のようなものは何もない。むしろ、これをダメットの意味で实在論的に解してしまうことこそ、我々が本来理解していたはずの「対象」の意味の自己誤解に基づく歪曲である。

ここで千葉の言う「認識への依存」や「観念論」が非常に強い意味で言われているということの確認から始めよう。千葉は、拙著で挙げた（ビールが飲みたいという欲求の対象としての）「本物のビール」や（ある時代の天文学者や現代の数学者の探索対象としての）「惑星ヴェルカン」・「奇数の完全数であるような最小の自然数」を例として引いたうえで、

「本物のビール」とはどういうことか？ ここでの叙述で、富山氏は特殊な観念論的存在論へのコミットメントを表明していないから、この説明は常識实在論のもとで理解されても仕方ないし、実際ほとんどの読者もそう解しただろう。だとすれば、「本物のビール」とは、私の認識ないし志向性から独立にそれ自体で存在しているところのビールだ、ということになるはずだ。（千葉, pp. 127-128）

その条件のもと、該当するようなものが存在するか否かは、もっぱらそれ自体で存在している世界の側の都合による；志向されているのはすなわち、このような意味で、我々の認識や、それが我々によって志向されている、ということからすら独立に、それ自体で存在しているものである。（千葉, p. 128）

さて、そのような数の「現物そのもの」ということの含意の一部は次のことだろう：そのような数は、件の手続きを通じて発見されたりされなかったりする数であるが、そうした数があるかないかは、私がそのことを知りうるか、あるいはそれを私がそもそも思念するかにすら関わらず、それ自体で——いわばそれ自体で存在する自然数の側の都合で——確定している（千葉, p. 128）

と述べている。これらが、ビールが私の目の前にあるかどうか、惑星ヴァルカンが望遠鏡の視界に発見されるかどうか、奇数の完全数が見つかるかどうかといったことは私の自由になることではなく、私の主観の恣意によって生み出されるような主観的仮構物ではなく、私の志向ないし認識がどうあれ否応なしに決まってくるものである、という意味であるならば、それはまったくその通りである。しかし、その意味での「実在論」であれば、そもそも哲学史上まともな「観念論」のほとんどが認めているものではないだろうか。ここに、ダメットの意味で「実在論」的なものは何もない。

このことを理解するには、最後の例が最も扱い易いだろう。確かに、奇数の完全数であるとはいかなることなのかという意味、奇数の完全数であるかどうかを判定し、それを小さい方から順に探していく手続きなどはあらかじめ明確に決まっているものであり、それは私の自由になるようなことではない。この意味で、それを「自然数の側の都合で」と述べるのであれば、その点は認めてよい。しかし、これをダメットの意味で実在論的に受け取り、「いわばそれ自体で存在する自然数の側の都合で——確定している」ということでそれが確定的に真か偽のいずれかに定まっているのだという主張を含めて理解しているならば、それは飛躍である。確かにこの手続きによって当たり判定が出るのか出ないのかは、我々が勝手に決められることではない。しかし、「奇数の完全数が存在する」、「奇数の完全数が存在しない」ということの意味を、「我々が発見できる」、「発見できないことが証明できる」以外の仕方では説明することはできない。これは自然数上の全称言明とその否定の理解について前節で既に述べたことと同様である。そして、この両者に関して二値原理を前提してよい一般的な理由はない。発見できるか発見の不可能性が証明できるかのいずれかが必ず生じるはずだ、という根拠など何もないのである。それゆえ、探索手続きや証明の試みがどのように進みどのような結果を生むかは我々の恣意には委ねられていないとしても、そのことからダメ

ットの意味での実在論が帰結するわけではまったくない。これらは主観の恣意という意味での「認識に依存」する存在者ではないとしても、「認識と相關的」にしかその意味を理解できないような存在者なのである。

では、「対象そのもの」、「本物の対象」ということをこれほどまでに強調し、志向的对象と現実の、本物の対象そのものとの二重化を断固拒否する富山＝フッサールの議論のポイントはどこにあるのか。千葉は、「「本物の対象」という正解が、我々の経験とは別に世界の側で勝手に決まっているわけではない」（富山, pp. 238-239）という拙著の主張を挙げ、

富山氏による反実在論的態度表明——例えば、奇数の完全数が存在するかしないかは、我々がそれを知りうるかということからまったく独立に確定している、という考えを拒否するもの——と見えなくもない。しかしながら、ここで富山氏が本当にそのような考えているのなら、なぜそのようなことになるのか私にはさっぱりわからない。（千葉, p. 129）

と述べている。もしここで、奇数の完全数が存在するかどうかを我々が我々の都合で勝手に決めることができる、というような恣意性を考えているのなら、もちろん私の主張はそういったものではない。他方、そもそもダメットの意味での反実在論の主張とはそういったものではない。「奇数の完全数が存在する」、「奇数の完全数が存在しない」という主張の意味を我々は証明可能性と反証可能性からしか理解できないのであり、それを拒否すると言う意味で「我々がそれを知りうるかということからまったく独立に確定している、という考えを拒否するもの」と述べているのであれば、それはダメットの主張であるとともに私の主張でもある。その主張の理由は既に述べたとおりである。

ただし、「「本物の対象」という正解が、我々の経験とは別に世界の側で勝手に決まっているわけではない」という先に挙げた主張はこの文脈でのものではない。そうではなく、ここでの主張のポイントは、「我々は我々が経験のうちで出会うものを指して「対象」と呼んでいるのであり、経験の相関者としてのそうした「志向的对象」の他に「本物の対象そのもの」、「対象それ自体」のようなものを想定するいかなる発想も余分な二重化である」ということにある。千葉が引いた上記の例はすべてその議論のためにある。我々は我々の経験の中でジョッキに注ぎ、手に取り、喉を潤し、味わうことのできる「本物のビール」を求めているのであって、こうした欲求や知覚の志向的对象でないようないかなるものも「本物のピ

ール」ではあり得ない。そもそも「本物のビール」は「偽物のビール」や「ビールの幻」、「空想しただけのビールの映像」との対比で「我々が本当に飲むことのできる本物のビール」という仕方で意味を持つのであり、我々は初めから「本物の対象」、「対象そのもの」ということの意味を経験との相関の下でしか理解し得ないのである。ヴァルカンや奇数の完全数についても同様である。我々は初めから我々の経験と相関しうるものとして考えられた対象が当初の想定通りに経験の中で確認されるか否か、つまり直観的に出会うか否かについて問題にしているのであり、ここには初めからひとつの「対象」しか問題にならない。だからこそフッサールはいかなる種類の「対象」の二重化理論にも反対したのであり、二重化された一方がどんな種類の存在者かということは本質的な問題ではない。それゆえ、「カント的意味での「物自体」の想定は——しばしば考えられているほど——珍妙でもおどろおどろしいものでもない」(千葉, p. 130) という主張は、(それ自体で興味深く、カント解釈の精緻化にはそれ自体で私も関心はあるが)私とフッサールの対象概念の二重化の拒否に対してはまったく影響しない。それは元々、いかなる種類の二重化をも拒否する理論だからである。この点については以上の説明だけでは不親切ではあるかもしれないが、消化不良な読者はぜひ拙著の該当箇所をお読みいただきたい。

4. 秋葉の疑問への応答：検証方法が明らかでない言明の意味

秋葉の第一と第二の疑問は、道徳言明のような検証方法が必ずしも明らかではないものの意味をどうやって検証主義的に説明するのか、という点に関わる。確かに、「肉食は悪いことだ」や「少数民族を迫害すべきではない」、「人工妊娠中絶を全面禁止すべきだ」といった道徳言明は、数学的言明をはじめとする上述の事例のように、その検証方法や反証方法を明確には定められないように思われる。少なくとも、こうした言明を発する多くの人は検証方法の理解など持っていないことの方が普通だろう。そうであるならば、検証主義ではこれらの有意味性を説明できないのではないか¹¹。

11. なお、秋葉は他に註7で「すべての物の大きさが二倍になった」や「世界は過去の存在のすべての証拠とともに五分前に創造された」といった例も挙げているが、検証方法が想定できないような意味で解されたこれらの主張がそもそも有意味かどうかは、甚だ疑わしいと私は考える。

この疑問に十分に答えるだけの考察は私自身まだできていないので、今後の課題としてつつ暫定的に答えられる限りで答えておきたい。まず、拙著では十分に述べることができなかったが、「鍵概念」では最終節で簡単に述べた通り、検証方法として直接に特徴づけられるのはじつは事実を主張するような平叙文にあたる言明に限られる。じっさいには、それを元に命令文や疑問文、願望文などの形に変形したものはそこから派生的に説明される。つまり、命令文「窓を開ける」であれば「窓を開けた」が確証されるかどうかによって達成／不達成の条件が特徴づけられ、願望文「宝くじが当たったらなあ」であれば「宝くじが当たった」が確証されるかどうかによって成就／不成就の条件が特徴づけられるというように、元になる平叙文の検証条件によってその振る舞いが派生的に説明されることになる。

それゆえ、もし道徳言明が本来は道徳的「判断」を表明するような事実に関する主張ではなく、願望や命令のようなものであるならば、こうした派生的な説明を要求するだろう。この点で、単純な指令として解釈する立場であれば比較的容易に説明できるが、感情や態度の表明といった場合には、それがどのような言語行為なのか指令の場合ほど必ずしも明らかでないという意味で、やや説明は複雑になりそうである。

他方、道徳言明が文字通り「道徳的事実に対する判断」を述べているのであれば、その意味は検証方法によって与えられることになる。これは、必ずしも不可能なことではない。たとえば功利主義であれば「快の総量が増えそうだ」という証拠の提示が求められているわけだし、カント主義であれば（いささか単純化すれば）普遍化可能性のテストによる証明が求められていると解することができるからである。

だが、それぞれの立場ごとにそのように説明できたとしても、我々の立場が統一されていない以上、意味の説明がばらばらになってしまうのは共通の意味の理解が担保されず、我々には論争すら不可能になってしまうのではないかと秋葉は問う。だが、我々のコミュニケーションにとって意味はそこまで完全に一致している必要はない。たとえ対立があるとしても、快の増大に資することが明らかになれば少なくとも他のデメリットが見つかるまではプラスの証拠のひとつとしては評価されることが普通だろうし、普遍化不可能な身勝手な振る舞いであることが示されれば、少なくとも正当化を要するマイナスの証拠のひとつとしては評価されるだろう。他方、（自然演繹で言う導入則の意味での）こうした検証方法だけでなく、その（除去則の意味での）帰結も併せて意味を特徴づけるなら、

道徳言明の動機づけや是認、非難といった帰結への振る舞いは、多くの合意を持ちうるように思われる。それゆえ秋葉の第一・第二の疑問には、検証主義に基づく一貫した意味の説明で道徳言明の有意味性を説明する方策を考えており、意見の対立や議論のためにはある程度まで意味の共有がなされていけばひとまずは十分であると答えない。

5. 秋葉の疑問への応答：連関ファーストの志向性理論

秋葉の第三から第五の疑問は、拙著では判断の志向性を直観による充実化で説明するのみで直観そのものの志向性が説明されないまま放置されているという点に関わる。この問いについて詳論するには紙幅の問題からも独立した論考が必要となるため十分な回答は今後の課題とせざるを得ないが、ここで述べられる限りで答えておく。

まず、知覚の志向性を説明するとはそもそもどのような課題なのかを確認しておくことは有用だろう。というのも、もし心的諸作用の領域と「対象」ないし「存在者」の領域をあらかじめ並べて見渡しうるものとして独立に用意して、前者のどれに後者のどれが対応するのかという問いとして考えるならば、確かに知覚についても志向性の説明がなければならない。しかし、私の理解する限りフッサールの志向性概念とはそのようなものではない。むしろ、ある対象が直接に現れるという出来事そのものが直観と呼ばれる作用なのであり、この出来事から独立に対象そのものというものがあらかじめ考えられるわけではない。だがそれでも、知覚の志向性はやはり問題となりうる。それは、上記のように理解してもなお、対象は直観を含む心的作用を超越した志向的对象であって、心的作用そのものではないからである。知覚の場合ですらそうであるのは、一般に事物の知覚の場合にはそれは十全的な知覚ではあり得ず、さらなる充実化や幻滅による撤回が起こる余地を常に残すからであり、またたとえ十全的な知覚の場合であっても、その後別の心的作用が同じ対象についてのものであることが可能だからである。「対象」ないし「志向的对象」というものは、こうした「同じものについての様々な経験」のネットワークを結びつけるある種の機能として捉えられる。

そうであるならば、拙著の志向性理論は秋葉が示唆するように、ある種の推論主義的・全体論的な、「連関ファースト」の説明になると言ってもよいだろう（秋葉, pp. 116-117）。しかし、この見方は必ずしも「その真偽を検証するような経験

(確証や反証) がもつ役割はそこまで特権的なものではなくなる」(秋葉, p. 117) という帰結を導くわけではない。確かに直観でさえそれを正当化するさらなる経験の余地を残し、確証や反証の連関は単線的なものではない複雑なネットワークを成す。しかしだからと言って、どちらがどちらを確証するのかという方向性が失われ、完全に対称的な関係になるわけではない。また、このネットワークはあくまで「確証」や「反証」といった論理的な関係、推論的な関係であって、類似や近接による連想と言った関係ではない。この意味で、やはり確証と反証の関係が志向性の核であることは動かないのである。